

# “誇りある村”が地域を支え続ける

講師 財部 誠一

## 人には人格 村には村格

長野県の北端、千曲川をはさんで飯山市と向き合う山あいには木島平という村がある。1955年に穂高村、往郷村、上木島村が合併して誕生した当時、木島平村の人口は8206人だった。それがいまでは5300人ほどに減っている。2000年には65歳以上のお年寄りの比率が30%を突破。数字のオモテ面からは典型的な過疎の村にしか見えないが、この村には驚くほどの生気がある。たしかに出生数よりも死亡数が多いために村の人口は自然減が続いているが、「流入・流出」という社会的要因でみると、なんと木島平村は入超だ。農業もさびれ、雇用の場もなく、若者が都市へ流出する一方の村ではない。その原動力が芳川修二村長だ。村長は「一人に人格があるように、村には村格がある」という柳田國男の言葉に触発されて独自の村経営に取

り組み始めたと役場のホームページに記している。

「村には村独自の自然、地形、文化、歴史、人々の暮らしがあり、それらすべてが一体となって村格を織りなしています。『農を基軸とした交流の村』として、農業・農村の魅力を高め、交流を活発にする。農業農村の魅力、すなわち村格である」

内陸性気候の木島平は寒暖の差が激しいことにくわえて、豊かなブナ林が清々とした水をたたえている。とにかく水が美味い。だから、いい米ができる。日本一美味い米づくりを目指すかたわら、儲かる米農家育成のために村長自ら営業にも奔走する。最近では、アカデミックな農村文化・文明論の視座から村を再評価することを通じて、都会との交流の帯

柳田國男（1875-1962）  
兵庫県生まれ。日本の民俗学を打ち立てた民俗学者。詩人。東京帝国大学法科卒業後、農商務省に入る。貴族院書記官を経て、朝日新聞の委員となり、解任委員などを勤めた。辞職後は民俗学に専念。民間伝承の会・民俗学研究所を設立した。



奥山のブナ林で長い歳月をかけて蓄えられた雨水がゆっくりと里へと流れ出る。清らかなで美味しい水と寒暖の差が大きい気候は、おいしい米づくりに欠かせない。



村づくりのテーマは「自然劇場さじまだいら」。豊かな自然と美しい田園風景に囲まれ、市場でも高評価の「木島平米」の産地として、古くから稲作文化を育んできた。



財部 誠一  
たからべ せいいち  
経済ジャーナリスト

1956年東京都生まれ。慶応義塾大学法学部卒業後、野村證券に入社。同社退社後、3年間の出版社勤務を経てフリーランスジャーナリストに。金融、経済誌に多く寄稿し、気鋭のジャーナリストとして期待される。テレビ朝日系の情報番組『サンデープロジェクト』、BS日テレ『財部ビジネス研究所』などTVやラジオでも広く活躍中。また、政策シンクタンク『ハーベイロード・ジャパン』を主宰し、『財政均衡法』などの各種の政策提言を行っている。

## 地方分権は地方に任せよ

自助、自立の精神で村の活性化に取り組む村長を見ていてつくづく思うことがある。

地方分権は地方に任せろ、ということだ。それも末端であればあるほどよい。「道州制」や「地方主権」など、いまや地方分権が一種のブームになっているが、地方分権論者たちの顔ぶれをみていて強い違和感を覚えることがある。都道府県の首長たちが「地方」の代表として分権議論の中心者に祭り上げられていることだ。都道府県の分権論議は国との権力闘争の域をでない。芳川村長が地方自治の本質を語っている。

「魅力のある村とは何かを考えると、『魅力のある人』とは、自分の生き方に誇りを持っている人。とすれば、『魅力のある村』とは、何よりもそこに住む人々が誇りを持って暮らしていることが、大前提であるだろう。村のこれまでの歴史を大切にしながらも、これからの歴史は、この村に住む私たちがつくっていくものだ。村格を高めるといことは、今村に住む私たち一人ひとりの暮らし姿勢にかかっておるのではないか」

## 地方自身が考える 地方再生

木島平村では年収が1000万円を超える仕事にありつけたら、ちょっと自慢になるほど農業以外の仕事がない。しかし村長の自慢は「生活保護世帯が非常に少ない」ことだ。「孤独死もありえない」という。都市の常識とはまるで違う生き方があることを、国や都道府県が謙虚に受け止めることこそ、地方再生の第一歩なのである。戦後日本の経済成長は中央集権による全国一律、トップダウン型の政策運営によって実現されてきた。だが過去の成功体験はもう通用しない。「地方再生」は地方自身が考えることから始まらない。

なぜなら魅力ある村とは、その村に暮らす人々の生き方そのものにかかっている、からだ。どんな生き方を選擇するのか。村の人々の強い意思がなければ何も決まらない。それがないまま、いくら予算をつけても、一時しのぎに終わってしまう。

域拡大にも尽力している。その芳川村長に口説かれて、私も1年ほど前から木島平村のサポーターをやっている。

この村には「鬼島太鼓」という18歳以下の女の子だけで編成された和太鼓のチームがあるのだが、これがイケている。日本一と誰もが認める佐渡の和太鼓集団「鼓童」の女の子版と言ったところだ。長野北端の里山で育った女の子たちが海外公演で世界を飛び回っている。この里山は日本国内の都市はおろか遠く海外にまで通じる独自のアクセスを構築している。

東京国際和太鼓コンテストで2回の優勝に輝いている鬼島太鼓。音楽性、技術、そして、圧倒的なステージパフォーマンスで高い評価を得ており、アメリカやヨーロッパ各地からも招待を受け演奏を行っている。

